

2016年3月15日

出雲大社 宮司 千家 尊祐 殿

一般社団法人 日本建築学会
会 長 中 島 正 愛

出雲大社庁の舎の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会の活動につきまして、平素より格別のご高配を賜り深く御礼申し上げます。

この度、仄聞するところによれば、貴社「庁の舎」の建て替えを検討されている由を、伺っております。

ご存知のとおり、「庁の舎」は、戦後日本を代表する建築家、菊竹清訓の出世作となる建物です。「庁の舎」の設計によって、菊竹は日本建築学会賞（作品）、芸術選奨文部大臣賞、アメリカ建築家協会汎太平洋賞を授与しているようにこの建物は、国内外で高く評価される傑作といえます。また「庁の舎」は、戦後に、日本から世界へむけて初めて発信した新しい建築理論「メタボリズム」（新陳代謝）を具現化した代表的作品として、国際的にも評価が高く、世界の現代建築史のなかでも、重要な建築物として位置づけられております。

山陰地方には、旧島根県立博物館（1959）、ホテル東光園（1964）、島根県立図書館（1968）、田部美術館（1979）、出雲大社神祇殿（1981）、島根県立美術館（1998）等、菊竹が設計した建物が数多く残されております。とりわけ「庁の舎」は、これらを代表する建築として国際的に強い発信力を持っており、山陰が世界に誇る文化・観光資源として、その重要性は今後さらに増していくものと考えられます。

また、「庁の舎」は、旧来のものが焼失したため、先代宮司の千家尊祀氏と復興奉賛会会長の第23代田部長右衛門氏（元県知事）が協力して募財活動に東奔西走し、多くの方々の寄附によって再建された耐火（鉄筋コンクリート造）の社務所です。このため「庁の舎」は、戦後の島根県で展開された多様な社会・文化的活動の代表例の一つであり、地域の現代史を語る上でも欠かせない建物といえます。

「庁の舎」は、竣工から五十年以上が経過しており、すでに文化財的な価値を有していますが、その独特の外観から、出雲大社に参拝するひとびとの記憶に残る建物であり続けています。建設当時からの雨漏り問題など、多大なるご苦勞があったことを聞き及んでおりますが、それにもかかわらず、今日まで大切に維持管理してこられたことに、感謝と敬意を表するとともに、改修工事による保存活用を今一度前向きに御検討くださいますようお願い申し上げます。

なお、本会は、「庁の舎」の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2016年3月15日

一般社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 後藤 治

「出雲大社庁の舎」についての見解

1. 建物概要

「出雲大社庁の舎」は、神社の管理事務所兼宝物殿として 1963(昭和 38)年に建設された鉄筋コンクリート造平屋建て(一部中2階)、延床面積 631 m²、築 53年の建物である。元は木造で建てられていたが、1953(昭和 28)年 5月の失火で拝殿とともに焼失した経緯から、防火に優れた鉄筋コンクリート造で再建された。設計者には、奉賛会会長を務めた第 23 代田部長右衛門の推薦で、菊竹清訓が起用された。

菊竹は、久留米の大地主であった生家の倉と出雲大社本殿の間取りの相似性から、本殿の原型を“米倉”であると直観し、「庁の舎」のデザインに刈り取った稲を干す“稲はで”をモチーフとすることで本殿に連なる物語性を与えた。

全般的に 意匠と構造技術が高い次元で統合されており、建築の専門家からの評価は極めて高いが、その一方で維持管理面では、建設当時から慢性的な雨漏りに悩まされてきたことも指摘しておかねばならない。建設後、儀式室等の内装改修やプレハブ便所の増築、平成の大遷宮にともなう仮拝殿の接続などの改変が行われている。

2. 歴史的価値

出雲大社庁の舎の歴史的価値は以下のように認められる。

(1) 日本が初めて世界へ向けて発信した新しい建築理論「メタボリズム」を具現化した典型的作品の一つであること

1960(昭和 35)年に日本で開催された世界デザイン会議で、菊竹清訓、槇文彦、黒川紀章ら当時の若手建築家グループは、「メタボリズム」(=新陳代謝)という新しい建築理論を発表した。これは生物が代謝を繰り返しながら成長する仕組みを建築や都市計画に取り入れようとするものであり、それまで欧米の影響下で近代化を進めてきた日本の建築界が、世界に向けて新しい建築理論を発信した初めての運動であった。

「庁の舎」は、新しい理論を实践する上で、構造面でも新技術が採用されている。「庁の舎」は、橋梁技術の応用によって 40m 以上もの長大なスパンを持つ豪壮な柱・梁構造と、その梁に寄せ掛けられた繊細なコンクリートルーバーの二つの部分から構成されている。前者は長い年月にわたって建物全体を支える主要な骨組みであり、鉄筋に対するコンクリートの被覆を 100mm(通常は 50mm 程度)とするなど高い耐久性が付与されている。一方、後者は部材の劣化や建物用途の変化などに応じて容易に更新できるよう、品質と供給の安定した工場生産の組立式コンクリート部材が採用されている。

この階段状のルーバーは、表面に一定の雨水を貯めながら順々に下の段へと水を落としていくようデザインされているが、これは日本の水田を表現したものであると同時に、段状に積層した人工土地のひな型と見ること

ができる。“階段状の人工土地”というアイデアは、「樹状住居」(1966)や「層構造モジュール」(1972)など菊竹の建築作品や都市計画案に繰り返し登場するモチーフであるが、「庁の舎」はその原点といえよう。

このように、「庁の舎」は、環境の変化に柔軟に対応できる更新システムを備え、かつ都市計画的なアイデアを内包している点において、メタボリズムの建築理論を具現化した典型的な作品として重要であり、意匠と構造が高い次元で融合した傑作である。

(2) 日本を代表する建築家・菊竹清訓の代表作であること

菊竹清訓は1928(昭和3)年に福岡県久留米市に生まれ、早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、村野藤吾の設計事務所等を経て、1953(昭和28)年に独立し、2011(平成23)年に逝去するまで数多くの建築作品を世に送り出した。菊竹は、日本建築学会賞(作品)をはじめ数々の賞を受賞しており、メタボリズムを代表する建築家として国内外で高く評価されている。代表作として、「庁の舎」のほかに、日本万国博覧会のエキスポタワーや沖縄国際海洋博覧会のアクアポリスなどが知られている。一方で、菊竹の薫陶を受けた建築家も多く、菊竹事務所からは伊東豊雄をはじめ多くの著名な建築家が育っている。

「庁の舎」は、前掲の日本建築学会賞(作品)、芸術選奨文部大臣賞といった国内の賞だけでなく、アメリカ建築家協会汎太平洋賞の受賞対象作品であり、菊竹が日本を代表する建築家として認められる契機になった初期の傑作として重要なものである。

(3) 山陰の建築文化を世界に発信できるポテンシャルを持つ希有な文化・観光資源であること

「庁の舎」は、菊竹の山陰地方における一連の建築作品の代表作としても評価される。菊竹は、「庁の舎」の他にも、「島根県立博物館」(1959)、「ホテル東光園」(1964)、「島根県立図書館」(1968)、「島根県立武道館」(1970)、「田部美術館」(1979)、「出雲大社神祇殿」(1981)、「境港マリーナホテル」(1985)、「島根県立美術館」(1998)といった数多くの作品を山陰に残しており、地域の建築文化の大きな特色となっている。

菊竹作品を巡礼するために山陰を訪れる建築家や研究者、学生は現在も絶えることがなく、海外からの来訪者も珍しくない。「庁の舎」は、国宝・出雲大社本殿と並んで、山陰の建築文化のイメージを世界へ発信できるポテンシャルを持つ数少ない文化・観光資源の一つとして重要なものである。

3. 総合的評価

以上のように、「庁の舎」は、日本が初めて世界に発信した建築理論「メタボリズム」を具現化した典型的な建築であり、日本を代表する建築家・菊竹清訓の代表作でもあることから、日本の近現代建築史において特に重要な作品として位置づけられる。その証左に、「庁の舎」は日本建築学会賞(作品)の受賞対象作品であり、DOCOMOMO Japan(日本におけるモダン・ムーブメントの建築)でも100選に選ばれている。

一方、山陰には、多数の菊竹作品が遺されており、地域の建築文化の大きな特色となっているが、その中でも「庁の舎」は国際的に評価が高く、特に強い発信力を持っている。すでに築50年を経て文化的価値も有しており、山陰が真に世界に誇ることのできる文化・観光資源としても重要である。

なお、耐震性能については、「庁の舎」にはプレストレストコンクリート工法が取り入れられているが、通常、一般的な建物よりも高度な構造計算によって設計されることになっており、阪神・淡路大震災の際にも大破した建物はないとされる。とりわけ「庁の舎」は、シンプルな構造になっており、作用荷重に比べて柱や壁の鉛直部材

が大きいことから、十分な耐震性があることが伺える。雨漏りの課題はあるものの、取り壊して再建するよりも、改修による保存再生の方途を探ることが切に望まれる。

4. 建築写真



図 1 庁の舎外観(撮影者:足立正智)



図 2 庁の舎内観(撮影者:足立正智)